

資料をよむ

～「立川村役場文書」歴史民俗資料館所蔵から～

明治地方制度の諸相—名誉職・等級選挙に注目して 近代部会編集委員 高江洲昌哉

もし、手元に高校の日本史教科書があるのなら開いてみてください。明治憲法の制定のところで、「市制・町村制」という法律がゴシック体になって明治21（1888）年に公布されたことが記述されていませんか。なぜ、重要な歴史用語として覚える必要があるのでしょうか。今回は、明治の地方制度を取り上げ、そこから、立川の近代を考える糸口にしたいと思います。

史料① 大正9年庶務雑件

まず、市制・町村制の特徴を挙げておきましょう。①町村長は町村会によって選ばれる、②町村長・助役といった役場吏員は、原則無給の名誉職とする（雇などの事務職員には給与を支給）、③議員は納税額によって区分された1級・2級選挙人によって選ばれる（議員も名誉職）。この「無給の名誉職」による自治が明治地方自治の基本原則といえます。

なぜ、明治地方自治は、このような論理をとったのでしょうか。「市制・町村制」に付随して公布された「市制町村制理由」には、「国家の基礎を強固にするため、国民が国家に尽くすように、地方の人民が名誉のために無給で其の職を尽くす」とあります。国家への義務を果たす訓練論的な考え方が反映されていたようです。

明治地方自治は無給という原則のため、町村長や議員をつとめるためには一定の財産が必要でした。もっとも財産だけでなく、「人望」も必要なので、明治の地方自治は、担い手に即して「名望家自治」とも呼ばれています^{*1}。現在、こうした名望家たちが残した史料を分析して、「名望家自治」の実像を分析する研究が全国各地で活発に行われています。これを立川に残された史料から確認し、国の制度に規定される形で、どのように地方自治が展開してきたのかを明らかにするのが、近代部会の仕事になります。

「無給の名誉職」という役割は、「無私の公共心」を求めるといふ理想の一方、「無給」である点は「国家にとって都合の良い」部分でした。しかし、この無給原則は、多くの町村で政府の思惑通りにはいきませんでした。旧『立川市史』にも、町村制施行直後に立川村・砂川村で村長を有給吏員とする条例が制定されたことが記載されています（『立川市史 下巻』立川市史編纂委員会、1969年、944頁～947頁^{*2}）。一般的には、「無給の名誉職」が有給吏員化される過程は、給与目的で就任することを批判する論と、有能な人物を揃えるという現実との妥協の過程でした。

ここからは、立川村役場文書から、等級選挙に関する史料（史料①）と吏員の報酬給与に関する史料（史料②）を紹介します。

史料①は、大正時代にそれまでの立川村の村会議員選挙（等級別）有権者数と議員数の変遷を記したものです。町村制第13条第2項は「選挙人中直接国税の納額多き者を（中略）一級とし爾余の選挙人を二級とす」とありますが、史料①から、立川村^{*3}の選挙の実相【明治40（1907）年^{*4}（1級・33人—3人、2級・133人—3人）、明治43（1910）年（1級・28人—3人、2級141人—3人）、大正2（1913）年（1級・19人—6人、2級・145人—6人）、大正6（1917）年（1級18人—6人、2級・133人—6人）】を確認することができます。例えば、大正6（1917）年

*1…「市制・町村制」では選挙資格のある人を住民と区別して公民と表記しています。

*2…ただし明治25年の砂川村会議事録を見ると、有給村長ではなく名誉職（無給）に決めたことが記されています（『廿三年ヨリ廿五年ニ至ル村会書類』に所収）有給／無給をめぐる動きは複雑なので、今後詳しい調査が必要です。

*3…本欄では立川村を紹介しましたが、砂川村役場文書にも砂川村の村会議員選挙の記録が綴じられており、砂川村の等級選挙の実態も確認することができます。

*4…明治40年の当選議員数合計が6名なのは、半数改選によるものです（明治40年の選挙については、『立川村々選挙ニ関スル書類』に所収）

は1級選挙人18人が6人の議員を選び、2級選挙人133人が6人を選んだという事が分かります。

名誉職は無給といいながら、費用弁償や報酬はありました（町村制・第55条）。史料②は、町村長らの待遇改善の経過を示す文書の1つです。大正9（1920）年の「村吏員待遇表」には、町村長の欄はありませんが、大正10（1921）年の町村吏員報酬給料額一覧表には、町村長の欄があり、報酬給料額が記されています。このような調査が行われるように、町村長以下雇に至るまで、役場機能を維持するため、待遇の確保と把握は大事な問題になっていました。

歴史は、史料を無視して語ることはできませんが、史料の字面をそのままなぞるだけでは歴史になりません。史料が作られてきた当時の時代背景などを考えながら過去の姿を明らかにしていくことが、歴史に迫る作業ということになります。それは、検証と顕彰の間を往復しながら歴史像を豊かにしていく作業ともいえます。過去を明らかにし未来の指針を作るのが、新・立川市史の目的です。

史料② 大正10年庶務雑件（左）／大正9年庶務雑件（右）



資料提供のお願い

立川市は普濟寺や諏訪神社など優れた文化遺産が点在しています。近年は開発によって、地域に受け継がれてきた歴史的遺産が転換期を迎えています。市史編さん事業は、立川市がこれまで歩んできた足跡を記録し、後世に伝える使命があります。市民のみなさまがお持ちのさまざまな資料や情報の調査・収集が不可欠です。

文字としては残されていないものでも貴重な生活の記録となります。ご提供いただける資料やお聞かせいただけるお話がありましたら、下記市史編さん担当までご連絡ください。

今後、市史編さん事業の関係者が資料収集やお話を聞くために、みなさまの元へお伺いすることがあります。ご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

関係者は従事者証を携帯しています

※従事者には、編集委員／特定部会委員／主任調査員／調査員の種別があります。

【資料の例】

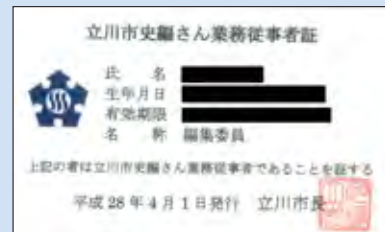
■文書、書類、印刷物

江戸時代から平成に至るまでのさまざまな古文書・書類・会誌・記念誌、チラシ・広告などの印刷物。

■絵図、地図類、写真映像、音声

土地の変遷や街並みのわかる絵図、地図類、景観や人の暮らしを写した写真や映像、音声など。

■地域の年中行事・信仰、ムラのつきあいや慣習など



市史編さん広報紙 たちかわ物語 vol.2

平成28(2016)年9月16日発行

発行 立川市産業文化スポーツ部地域文化課市史編さん担当

レイアウト 山下祐香理

〒190-8666 東京都立川市泉町1156-9

TEL (042) 506-0021 / FAX (042) 525-1601

E-mail chiikibunka-t@city.tachikawa.lg.jp

URL http://www.city.tachikawa.lg.jp/chiikibunka/sisi/hensanshitu/shishi_top.html

印刷 りょうせいデジタル株式会社